

謹賀新年 年頭の所感に代えて

2015年も押し迫ったころ、随分と電子書籍の執筆に没頭していたので、年末年始は久しぶりに休み呆けてやろうとテレビばかり見て過ごしていた。見ているうちにあることに気がついたので、伝えておきたい。

一つは紅白歌合戦から。いつのころからだろう、若い人達の歌の殆どが、誰かへの応援歌になってしまっていた。あらためてその歌詞を字幕でしっかり読んでみると、何を苦しんでいるのか、悩んでいるのかわからないが、一人じゃない、怖がらないで、と歌いかけるものばかりで、おまけに歌いかける対象は、みんな、孤独で、繊細で、それこそ誰にも分かってもらえないフリーク（奇妙な、マニアック、日本語でいうオタクっぽい存在）のようだ。この人たちに対して、歌い手が、わかってあげる、かまってあげる、優しくしてあげる、と歌い上げることで、待ち構えている人たちの気持ちは増幅され、ファンが増えていく。どうやらそういう仕組みが、成功の秘訣らしい。

もっとも、この手の、わかって、かまって、優しくして志向が広がったのは、昨日今日の話ではない。それがネット社会の産物であることも、別に本など読まなくても誰しも感じるところである。しかしそろいもそろって、こうして右も左も、孤独で繊細で誰にも分かってもらえない人達を相手にした商売（歌もまた商品であることには変わらない）ばかりがはびこるのは、それなりに大きなビジネス上の戦略が、誰にも気づかれぬまま静かに進行している可能性が高い。

そんなことをつらつら考えながら、もう一つ、元旦にこれまたNHKが放送していた“新春TV放談”、という番組を見て、思考の手掛かりになるものを見つけた。

この番組自体は毎年、お正月に放送されるものらしい。初めて見たのだが、司会をお笑い芸人、ゲストにTV業界の有名人たちが呼ばれ、2015年のテレビがどうであったか話し合うものだ。残念ながら中身に意味はない。フジテレビがダメになったとか、ドラマが売れなくなったとか、所謂、業界人の愚痴話のオンパレードであり、それを天下のNHKが上から目線で放送したところで、視聴者に有益な情報は何もない。

ところがそんなくだらない放談の中で一瞬、画面が凍りついた瞬間があった。ゲストとして呼ばれていた、羽田圭介というれっきとした芥川賞作家（昨年、話題になった又吉直樹というお笑い芸人と一緒に芥川賞を受賞し、逆に注目を浴びた若手）が、ヒヤダインとかいう初めて見る音楽プロデューサーにかみついたのだ。

「あなたのいう“みんな”、って誰の事ですか？」

話のきっかけはこうである。ダメになった、とか、売れなくなった、とか所謂ダメ話が
続く中、ヒヤダインなる人が、“みんなはこう思っている”、“みんなはそういうことにはも
う関心を持たなくなっている”、と、“みんな”、“みんな”、と言う言葉を連呼し、あたかも
自分が時代の代弁者である雰囲気醸し出していたのである。

すると、さすがにこのヒヤダインも馬鹿ではない。すかさず、

「ああ、ごめんなさい、“みんな”とはネット市民の事です」

と説明していた。これを受けて司会者は面白おかしく羽田圭介をいじり、もとの和やか
な雰囲気番組を戻し、話はまたくだらない方向に進んでいった。

わかって、かまって、優しくして志向とネット市民。これが頭の中でつながった。
孤独で繊細で誰にも相手にされない人たち向けの商売を、ネット上で展開していくのが、
現代日本のビジネスにおける、勝利の方程式である。ヒヤダインは伶俐にこのことを理解
していた。羽田圭介はそれに対して反旗をひるがえした。彼の作品は呼んだことがないが、
恐らくは、ネット市民をターゲットにした創作活動など、真っ平御免なのだろう。
あるいは、本当に孤独で繊細で誰にも相手にされない人というのがどういうものであるの
かを、羽田圭介は知っているのかもしれない。

逆に言えば、明るく健やかで友達も一杯いて、昔ながらの中庸な人々を相手に普通の商
売をしても、らちが開かないのだ。例えば音楽の世界がその典型的な例である。

紅白歌合戦だって、殆どの歌手が昔流行った歌を歌っている。例えば洋楽の世界だって、
いまだに一番売れるのはビートルズである。少なくとも普通の人には、新しいものが入り
込む余地はない。普通の人には何も売れない時代なのである。

しかし孤独で繊細で誰にも相手にされない人たちはそうではない。
彼ら彼女らは自分たちの痛みが緩和されるものに惜しげもなくお金を払ってくれる。
人の弱みに付け込むことが、手っ取り早い金儲けのやり方であることは、昔も今も変わり
はない。大嫌いな認めたくない現実であるが、これは実に金になる。だからその手の曲が
バカ受けする。しかし問題はそのやり方で、孤独で繊細な人たちは、なかなか表には出て
こない。例え出てきたとしても孤独で繊細で誰にも相手にされないとは言わないし、実際
に表に出る時には身を固くし、けして痛みを感じないように鎧を付けている。
だから匿名性が守られるネット社会ありがたい。ネット社会なら、自由に自分の嗜好で
消費することが出来る。

TV 業界関係者たちが口をそろえて、昔は良かった、無茶なことやっても許されたし、視聴率なんてすぐ取れた、と嘆いていたが、物事には循環するものと循環しないものがある。新聞がラジオに代わり、それがテレビとなり、今はネットである。時代はけして後戻りはしない。かつてのようなビジネスモデル、TV 業界的に言えば視聴率獲得モデルはもはや存在しえないのだろう。また視聴率を獲得したところで、それがスポンサーのビジネス拡大につながるかと言えば疑問だ。普通の商売は毎年変化なく続き、新しいモノが割り込む余地は少ない。それでも新しいモノを売ろうとすれば、それは中身だけでなく今までと違った販路を切り開いていかなければならない。その一つがネット社会である。

しかし、とあらためてここで思う。だとすればネット社会は恐ろしい。新しいことを始めようとするばもはやネット社会を利用せざるをえないが、さりとてネット社会を利用したところで成功するとは限らない。むしろ今のテレビ業界などは、ネット社会に振り回され、それこそネット市民の顔色をうかがうばかりで、実際にはネット社会に振り回されている。それが視聴率至上主義の宿命であると言えればそれまでであるが、だとすればそのビジネスモデルは斜陽である。

それでも企業として栄華を極めることが出来るとすれば、それは保護行政の賜物である (TV 業界は電波三法に守られた許認可事業である。外資系の参入は認められないし、外国人投資家は株式の 50%以上を取得することが出来ない)。保護されていれば、競争原理が働かない。競争原理が働かなければ、淘汰が進まない。淘汰が進まなければ、水は淀んでいく運命にあり、テレビはどんどん面白くなくなっていく。

ところが、こうしたネット社会において、売り上げを伸ばそうとすれば、先ほどの勝利の方程式が顔をのぞかせる。確実に消費が伸びる、孤独で繊細で誰にも相手にされない人々をターゲットにした、人の弱みに付け込んだ商売が、最適な解として導き出されることになる (しかし最適な解である以上、これも早晩、飽和状態となる。何故なら最適な解と言うものは、よく考えれば誰だって辿りつくものであるからだ)。

私自身、昨年より、ネットを通じてメルマガを始め、年末には電子書籍での出版にまでこぎつけた。それこそネット社会と本格的に付き合っていくことを決意したのであるが、1 年が過ぎたところで、今こうして立ち止まって考えている。勝利の方程式など信じないし、最適な解は、私が欲しいものではない。

あらためて自分を戒めている。ネットは利用するものであって、ネットに振り回されてはいけない。そう考えればテレビもラジオも同じである。

テレビもラジオも、これに振り回されてはいけない。幸いなことに、私の場合、実際に対面して本音で語りかけることが出来るセミナーがある。更に、自分の本当に言いたいことを本として出版する手立ても構築できた。何よりも、こうして信頼してくれるオフィシャル会員が集まってくれた以上、自信を持って相場と向き合うことが可能だ（ここまで書いたところで、先ほどの羽田圭介にも、信頼してくれる読者と言うものがあるに違いなく、その読者こそが彼にとって一番大事な、“みんな” というものであるのだということに気が付いた）。

今年も、テレビでもラジオでも、否、と言うべきところは、否、と言うであろうし、また自分の間違いに気づき、慌てて釈明に追われることもあるだろう。それでも私には、私にとって一番大事な“会員のみんな” という存在に、良かれと思って決断し、果敢に相場と向き合っていこうと思う。

あけましておめでとうございます。今年もどうぞよろしく申し上げます。

2016年1月3日
岡崎良介